
彼らが役に立たないので

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らが役に立たないので

【Nコード】

N6592I

【作者名】

武倉悠樹

【あらすじ】

独り暮らしの大学生の部屋に突然の来訪者。

主人公と闖入者とのずれたまま、それでも淡々と進む会話をお楽しみください。

部屋に響いたチャイムにドアを開けたらそこに悪魔が立っていたと言ったら、一体何人の人間がそれを信じてくれるだろうか。

信じた人がもし居てくれるならありがたいが、その人は「もしもし俺だけど〜」と切り出す電話に注意すべきだ。つまり、信じる人の判断力を疑わざるを得ないくらい荒唐無稽な話ということになる。これからその話をする俺が言うのもなんだけど。

まあ、とにかく悪魔が立っていたんだ、俺の家のドアの前に。

ピンポーン！

物で散らかり只でさえ狭いワンルームに無機質な音が響く。

来客を告げるその音を聴いたのは随分と久しぶりの事だった。田舎から上京し、大して交友関係の広くない一人暮らしの大学生の生活なんてそんなものだろう。

ピンポーン！

その数少ないチャイムを鳴らした来客は新聞と宗教の勧誘、NHK受信料の督促と厄介者三拍子だった。

ピンポーン！

つまりチャイムの音はロクなものじゃないというのが俺の経験則

から割り出した事実。

ピンポーン！

だったはずなんだけど、ここまで執拗にチャイムを鳴らされては無視というわけにもいかないだろう。

どうやって勧誘を断るか。どうやって受信料の支払いを拒むか。そんな事を考えながらドアノブを捻る。

ドアの隙間から恐る恐る顔を突き出した俺を迎えたのは、一言で言えば異様な男だった。

細身でスラツとしたその体躯を包むのは黒のテイルコート。装飾品はステッキにシルクハット。英国で最も正装とされるその装いの着こなしを男は完璧にこなしていた。一片のシミもないシャツに、折り目正しいスーツと歪みの無いネクタイ。そしてそれらに負けぬ風格を漂わせている男。惜しむらくはここがサロンでも宮廷でもダンスホールでもない事だ。

三百六十度どこから見てもジェントルマン姿のその男は、場違いな装いゆえに違和感を醸していた。

「突然の訪問という無礼をお許しください」

紳士然とした男が紳士然とした口調で話し始める。

事態に付いていけない俺は慌てふためくしかない。

「え？いや、あの、あんた誰？っていうか何で？いや、あの、家間

違えてないっすか？えっと、あの俺、宮う」

頭に浮かんだ疑問や言葉がそのまま口から飛び出すほどの狼狽を見せる俺がなにを言おうとしたのかを敏感に察知したのか、狼狽する俺の声を遮ると、紳士は続ける。

「存じております、宮内正道さんですね？」

俺と対照的に落ち着き払った紳士の言葉はしかし、俺の混乱を加速させるのみだ。

見ず知らずの人間に、自分の名前が一方的に知られているというのは気分の良いものでもないし、疑念も湧く。

想いを正直に出した俺の表情を汲みとってなお、丁寧でありながら且つ泰然とした態度を紳士は崩さない。

「心中はお察しします。しかしどうしても重要なお話をさせていただきたく参りました。多少お時間をいただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

紳士は曲げた右手を胸の下に添えながら恭しく頭を下げた。

勝手に気分を害され、すぐさまその心中を慮られ、挙げ句の果てに馬鹿丁寧なお辞儀までされた俺は気づけば、どうぞと怪しい来客を家に招き入れていた。

冷静に考えればなぜ素直に要求応じたのか、自分でもよくわからない。強いて言えば、瞳、声、姿、しゃべり方など、紳士の見た目、一挙手一投足のすべてに異様な雰囲気と不思議な力を感じたのだ。

その力が俺の疑念の全てを消したわけではなかったが、それでも、紳士の要求をむげに断るといふ選択肢は頭に浮かばなかった。

ドアを大きく開き、紳士を家の中へと誘う。

後ろ手でドアを閉めつつ、部屋へと歩く紳士の背中を見つめながら、妙なことになったな、とぼんやり感じていた。

汚れた部屋でちやぶ台を挟んで座る男が二人。

一人は俺。

もう一人はジェントルマンルックな珍客。ちなみに紳士は正座をしている。

あまりにも違和感を覚える光景に、一瞬頬をつねれば夢から醒めるんじゃないかと馬鹿な考えがよぎった。

もう一度気持ちを落ち着け、目の前の紳士を観察する。

日本人離れた高い鼻と彫りの深い面長の顔。髪も目も黒く、言葉のアクセントにも違和感は無いのだが、それでもすらりと細長い手足に燕尾服では、日本人なのかも窺わしい。

不躰に相手を観察するが、紳士は一向に気にした様子を見せない。

俺の心中の疑念を知ってか知らずか、謎の紳士はステッキとシルクハットを脇に置きながら、口を開いた。

「では諸々ご説明させていただきます。よろしいですか？」

紳士の口調は落ち着き払っていた。

混乱を隠せない俺の方がおかしいのではと気後れしてしまう。

「宮内正道さん、単刀直入に申し上げます。世直しをなされませんか？」

「はっ？」

紳士の言葉に俺の思考はまったくついていけず、間抜けな音が口から漏れる。

そんな俺を無視して紳士は続けた。

「いえ、このままでは世界が滅んでしまう可能性ができてしまうのです。是非とも宮内さんにご協力いただき世直しをしていただけないかと」

時が止まる。

そしてこのあたりで徐々に思考の回転が追いつき、それと同時に後悔の念が強く湧き上がり始めた。

脳内では赤色灯が回り、サイレンがけたたましく鳴り響いている。

駄目だ。

危険だ。

今すぐにこの男を部屋から追い出せ。

警告が頭を駆け巡る。

今、目の前の紳士は何と言ったか。世界が滅ぶから世直しをしなきゃならない、確かにそう言った。

考えるまでも無く確信する。

嗚呼、こいつは宗教だ。

「実はですね……」

「あのっ……!」

世界の滅亡なんていう眉唾の極みみたいなことを口にしておきながら、臆面も無く話を続けようとする紳士の言葉を大急ぎで遮る。

なんとしてでもこの紳士にはご退出願わねばならない。

厄介者を招きいれてしまった結果が多少の時間的損失、精神的苦痛で済んでる今のうちにだ。

このまま行くと、霊験あらたかな壺や万病に効く水がこの部屋の仲間入りを果たし、変わりに俺の口座が一足早く冬を迎える羽目になる。

「いかなさいましたか？」

「あの、ですね」

俺は意を決して口を開いた。

「わかるんです。あなたの言ってる事」

「おお、わかって頂けますか!」

「すつごく良くわかるんですよ。その、えっと、世界が今危機にあることも。そのために、えっと、世直しって言うか、あの世界を救わなきゃいけないですよね」

「そうです、そうです。その通りなんですよ!それでなん」

「なんですけど!」

これ以上インチキ紳士に口を挟ませるわけにはいかない。こちらは自分の判断ミスから間合いに入られてしまったのだ。会話を成立させてこれ以上不利な状況に追い込まれるわけにはいかないのだ。

「俺には、その世直しとか向かないかなあって言うか、なんていうんですかね。いや、あの、良いと思うんですよ?世直し。やっぱ誰かのためって素晴らしいですね、ええ、わかりますよ」

心にも無い事をペラペラと喋りながら、やんわりと、それでいて確実に拒絶の意を伝える言葉を脳内から引つ張り出す。

「あのっ!」

「はい、なんででしょう?」

俺は紳士に向かって止めになるはずの一言を放つ。

「俺、神様とか興味ないんでっ!!」

俺の言葉に紳士は間をおかず続けた。

「あ、ええ、構いませんよ。私は悪魔ですから」

このとき今日二度目の時空停止を俺は味わった。

私は悪魔ですから。

その言葉の真意を探るべく、必至に考える。

考える。

考える。

わからない。

どういうことだ、宗教の勧誘じゃなかったのか。それとももしかして悪魔崇拜とか、なんかよくわからないけど黒魔術チックな変な邪教みたいなやつなんだろうか。だとしたら不味いぞ。邪教を信仰する人の思考なんてまったくもって理解できる気がしない。理解できないと言う事は明確な理由つけて断る事ができないって事じゃないか。

「ええと、ですね」

こちらの思考が纏まる前に紳士は口を開いていた。

「諸々説明の順番を誤ってしまいましたね、失礼しました。先に申し上げておきますが、私が宮内さんのところをお尋ねしたのは宗教の勧誘ではありません。霊験あらたかな壺や万病に効く水を高額で売りつけたりはしませんし、ましてや悪魔崇拝の黒魔術チックな邪教の信者と言う事ありませんのでご安心を」

紳士は淡々と、俺の心配事を取り除く発言をする。

あまりにも的確に。

その落ち着き払った言葉に、俺の背筋が凍った。

目の前の存在はなにか異質なものだ。そう直感が告げる。

なぜ、この男は俺が頭の中で考えていた懸念を知っているのか。

「それは、私が悪魔だからです」

さも当然のように、俺の脳内の疑問に答える紳士。

まるで、俺の意識と会話ができるかのよう。

「ええ、可能です」

紳士、いや悪魔が嗤った。

「失礼かとは存じましたが、私が悪魔であると言う事を信じていた

だくため、少々無粋な手段を取らせて頂きました。無礼をお詫びいたします」

深々と頭を下げながら紳士の姿を模した悪魔は続ける。

俺の背筋は依然として凍りついたままだ。

「悪魔が存在し目の前にいると言う事が、あなたの常識にとっくに荒唐無稽な事であるかと言う事は存じております。しかしこれで信じていただけたでしょうか」

荒唐無稽とは言え埒外の事実を見せられてしまっただけでは信じる以外術は無い。

「恐縮です」

悪魔は俺の意識と会話を続ける。

「では、ついでと言っては何ですが、もう一つ私の話を信じてみてはいただけないでしょうか」

悪魔の目に力がこもった。

自らの思考を読む悪魔が目の前に座っている。そんな状況で俺の心中は、恐怖より好奇心が勝った。

もしかしたら余りにも突飛で奇想天外な状況の変化に恐怖心は臨界点をとうに超え麻痺し、正常な思考力はバカになっていたのかも知れない。

自分なりに力を込めて悪魔の目を見つめ返す。心のどこかで石に

されたりはしないだろうかと言えながら。

「話とは、なんでしょう？」

「ご理解いただき誠にありがとうございます」

悪魔は居住まいを正し、語り始める。

「では……」

その後、悪魔の説明は時計の長針が百八十度回転する間続けられた。

その間俺はほとんど口を開く事が無かった。質問することが無かったわけじゃない。その逆で質問する事が多すぎたんだ。

「こちらの恣意で説明を端折り簡略化するのは説明する側の不誠実」とは悪魔の台詞で、まあその懇切丁寧な説明にはめまいが起きるかと思ったほどだ。

なにせ、紳士の言ってることは単語からして理解できないのだ。

「不可逆性精神志向形成」やら「世界均衡核の調整微力」やら「共感性イメージの形而上具現化の総体」なんていう単語がなんの説明も無く飛び出してくる。

それらの単語に俺が眉根をひそめていると「共感性イメージの形而上具現化の総体と言つのは、かいつまんで言えば、こちらの世界

の哲学者ベルグソンが語るイメージの総体のような物が次元間の
交感、正確には一方向的にですが、それを果たしたものと思っ
てもらって結構です」等と悪魔は嘔みもせずにはべらべらと良
く喋る。

呆れ半分、諦め半分。説明開始から数分で俺は悪魔の話を理
解する事を諦めた。

目的を漠然と話の輪郭を把握する事に変更し、判らない事は
後でまとめて聞くことにした。

それが27分前の事だ。

「とうわけなんですよ。まあ先ほどの世界均衡核に
関しては我々悪魔の認識ですけどもね。とは言え恐らくこ
ちらの世界からの外郭観測」

「ああ、わかったから!!」

俺はもう我慢の限界だった。

「信じていただけのんですか？」

「信じるも何もまったく訳わかんないって言う事がよく
わかった」

「そうなんですか？」

俺の意識など筒抜けのはずの悪魔が小首を傾げる。

先ほど「意識を読むのは無礼だ」と侘びを入れたのは
どうやら本気だったようで、あれ以降悪魔が俺の意識を
読んでいる様子は無い。

もちろん俺は意識を読むなんて事は出来ないのだから、少なくとも俺が話の理解をとっくに放棄していたと言う事には今気づいたようだった。

「あんたの誠実さはよく伝わった。だから、頼む。もつともつと端折って、それからすごく簡単な言葉を使って説明してもらえないか？そうでないと思じる信じない以前の問題なんだ」

「それでよろいしのですか？」

「それでよろしいものにも、そうじゃなきゃわかんないんだよ」

「そうですね……平易な言葉で説明したほうがよろしい、と……。困りましたね」

悪魔が今まで一度も見せたことの無いような困惑の表情を浮かべる。

「えーっと、世界均衡核という言葉はお分かりですか？」

「いや」

「もしや、我々悪魔の存在があなた方人間のイメージの総体の超次元交感体という先ほどの説明はご理解いただけていないのでは？」

「ああ」

「なぜ、そのときご質問いただけなかったのですか！？」

「いや、だって判らない事に対する答えにベルグソンとか言う知らないおっさんが出てくるんじゃないかと質問してもしょうがないから」

無知を責めるような悪魔の言動に居心地の悪さを覚えるが知らないものはどうしようもない。

そもそも悪魔の方から持ちかけてきた話なのだ。わからないからといって責められる謂れは無い。

「そうだったのですか。お察しできずに申し訳ありません。しかし平易と言われました……」

「いや、謝られてもなあ……」

馬鹿正直な悪魔の態度に居心地の悪さは増すばかりだ。ここは俺の部屋だと言うのに。

ふと、思いつき、俺は悪魔に一つ提案をした。

「ならば、俺がわからない所を質問するから、それについてさっくりと答えてくれないか？」

「いいでしょう。なるべく平易にご説明できるよう努めます」

「平易じゃなくて、簡単に、な」

「これは失礼」

「じゃ、そうだな、えーっと」

悪魔。世界の滅亡。世直し。異次元交感体。イメージの総体。
世界均衡核。

意味のわからない言葉の羅列が頭の中をグルグルと周り、話の輪郭が霞の中に消えていこうとするのを必至で繋ぎとめる。

「まずこれだけは一番に聞いておきたい。あんたは誰だ？」

「何度も申し上げたとおり、悪魔でございます」

「うん、それはわかってる。ただな、俺の知る限り、悪魔なんて存在は実在しないんだ。キリスト教と

か、まあその辺の宗教は詳しくないんだけど、そういう教えの中に存在する架空の存在というか、象徴というか、なんていうかそういう存在なんだよ」

「その認識はあなたが間違っておりません。我々はあなた方、つまりはこの世界の人間ですね、その方々達が抱いてる共通認識が、別次元で存在を伴ったものです」

「んーっと、えー、そんな事あり得るの？」

「こればかりはあり得ると信じて戴くほかありません。現に私は存在しているのですから。ここで重要なのはなんでそんなことが、という事でなく、我々は人間のイメージが作り出したものであるという事実です。ちなみに我々も、つまりは悪魔も何故そんな構造になっているのかということは知りません」

「ふーん、えつと、じゃあ、何でその別次元の存在なはずの悪魔が俺ん家に来たわけ？」

「それを説明いたしますと少々話が飛躍してしまいますね。えー、原理そのものでなく、まずは世界の在り様をご説明させていただきますね」

「ああ」

「まず、この世界、つまりちやぶ台を挟んで私と宮内さんが座っている「今」「ここ」ですね。その世界を便宜上人間界としましょうか。その人間界とは別に二つの世界が存在します」

「二つ？あなたたち悪魔の居る世界だけじゃないのか？」

「ええ、違います。まず我々が存在する世界。これは便宜上魔界とでもしておきましょうか。それとは別に我々悪魔と同じように、人間界にすむ人々のイメージが具現化し存在が伴った世界があります」

「もしかして、神様か？」

「お察しの通りです。人間界の人々が『神』とする存在ですね。それらが存在する、そうですね、えーつと、なんと呼んだらよろしいでしょうか」

「いや、何でも良いよ。天界とかで」

「その方がイメージしやすいのでしたら、それで構いません。要は人間界が在り、そこに人間が存在している。そしてその人間たちの宗教観念やフィクションのイメージからなる天界と魔界が存在す

るといふことです」

「なんで、悪魔はそんな格好なの」

「いえ、別に悪魔がすべて私のような格好をしてるわけではありません。たまたま私の基になったどこかの誰かの悪魔のイメージがこんな格好であったというだけの話です」

「ふーん。んー、えっとー。俺たち人間のイメージはどこか別の世界で具現化するわけだよな」

「ええ、その通りです」

「だったら何で世界は二つしかないわけ？俺たちが持つてる実在しない存在のイメージって悪魔や神様だけじゃないぞ？龍とか、妖怪とか、ネッシーとか、UFOとか」

「仰るとおりですが、それに対しては我々は明確な答えを持ちません」

「わかんないって事？」

「そうです。わかっているのは人間がマイナスの感情、憎しみや怠惰、嫉み、嫌悪などを強く抱く時、魔界に人間の悪魔イメージを具現化した存在が現れるということです。天界についても同様で、こちらは好意や幸福、優しさなどのプラスの感情が基になっています」

「なんでそんなことわかるの？」

「我々悪魔は、おそらく神もそうだと思いますが、人間と異なり生

殖を経て赤ん坊として生まれ、成長をするわけではないのです。ある日突然、今現在の体と意識や知識をもって生まれるのですよ。ですから今お話したこともわかったのではなく、既知のものとして記憶に刻まれてるんです」

「へえ、便利じゃん」

「一概にそうとも言いきれないのですけどね」

「そうなの？」

「本題はそこではございませぬ」

「あ、ああ、そうか。ごめん」

「いえ」

「んー、じゃあ、核心っぽいことを聞いわ。世界が滅亡云々ってのは何？」

「それこそがこの話の肝要でございます。世界があなた方の住む人間界をはじめとして次元軸上で重ならない三つの存在で成立していることはご理解いただけましたね」

「えーっと人間界と魔界と天界って事だろ」

「そうです。問題はこの三つの存在のバランスが乱れている事にあります。我々悪魔は、人間界が基盤世界で、そこに付随する人間の意識によって構築されているイメージが他次元との媒介を果たし、魔界や天界という形而上次元で具現化し、成立させているのだと認

「識しております」

「ん、ごめんごめん。ちょっとわかんなくなってきた」

「そうですね」

悪魔は俺から視線をはなすと、辺りを見回すし脇に置いてあったステッキとシルクハットを手に取る。そして握り拳にした右手を俺の眼前に差し出した。

「この手が人間界とします」

そして人差し指を突き上げる。

「この人差し指がイメージ、つまりあなた方の精神世界です」

もう片方の空いた手で、突き上げた人差し指にステッキを乗せた。

器用に重心を探り当て、バランスを取る。

「このステッキの右端が魔界。左端を天界とします。本来人間界、人間の精神世界を支柱とした形而上世界は均衡がとれています」

「ふんふん」

「しかし、昨今、魔界に生まれる悪魔の数が増えているのです」

「人間が抱く負の感情が多くなってるって事？」

「その通りです。本来感情の多寡それ自体は問題無いのですが、相

対的に天界に生まれる神が減っていることが問題なのです」

悪魔は均衡のとれたステッキの左端にシルクハットを載せた。途端バランスを失ったステッキが悪魔の人差し指から落ちる。

途中悪魔の右手にぶつかりながらちやぶ台へと落ち、カラシカラシ、と乾いた音を立てた。

「バランスが崩れば世界は滅びます」

俺は余りに淡々とした悪魔の説明にいまいち実感を抱けずにいた。

「それ、ほんとなの？」

「残念ながら」

大して残念がっていない様に見える態度で悪魔は続ける。

「もちろん、今お見せした例えはものすごく単純化した場合です。先ほど少しお話したと思いますが、実は支点となる部分には世界均衡核と呼ばれるものが存在し、天界と魔界の均衡を図っているとされています。ですのでそう簡単に崩壊には至らないとも考えています。ですがいつかその時は来るとというのが我々悪魔の基本的な見解です」

「それで、世直しなのか」

「ええ。人間が抱くマイナスの感情を減らし、プラスの感情を増やします。それこそが最も分かりやすく世界を滅亡から救う手なのです。突然押し掛けた上に、この様な重責のある仕事をお願いするのは大

変心苦しいのですが、是非ともご理解いただき、どうか宮内さんのお力をお貸し願えないでしょうか？」

悪魔は恭しくその頭を下げていた。

最初に話を聞いたとき、目の前の男が何を言ってるのかわからないと思っただ。

より丁寧に説明を聞き、話を理解した今、理解なんてするんじゃないかと強く思っている。

まず最初の問題として、この悪魔から聞いた荒唐無稽な与太話を信じるかということだ。

直感的には嘘を言っていないように感じる。世直しの内容にも拠るが、本当に壺や水売りつけてこないのだとしたら、こんな話を話すメリットが理解できないというのもある。

次に信じたところで協力するのか、という問題だ。

もし、世界の滅亡が本当だとしたら。その場合は悩むまでもないだろう。

俺は誰かのための正義感に溢れるような熱血漢ではないが、世界の滅亡を放っておけるほど暢気でも馬鹿でもない。それに確かに嘘かもしれないが、そう考えて行動した末に、本当だった時の後悔と言ったらないだろう世界滅亡だ。

考えれば考えるほどやらない訳には行かないだろう。選択を誤った時の結果が世界滅亡ではリスクがでかすぎる。

しかし。

少し現実的な思考がよぎた。

目の前の悪魔は「マイナスを減らし、プラスを増やす」と簡単に言っただけだ。しかし大げさな言い方になるかもしれないが、事は世界を救うというスケールだ。もしかしたら今の生活を投げ出してまで取り組まなければいけないような事態になるかもしれない。

ふと自分の境遇を振り返る。

一年生二年生と、特にやりたい事もなく大学に行っていたら、いつの間にか三年の前期で卒業に必要な単位をほぼとり終えてしまった。同級生はこれから就活が待っていると不景気な顔を浮かべているものも多いが、田舎に帰り家業を継ぐという選択肢しか持たない俺には無縁の話で、そもそも大学に入ったのは家業を継ぎたがらなかった俺に対して、親父が「じゃあ、東京で四年間遊ばせちやるから」と言っただけで、つまりはあと一年半のモラトリアムを俺は確保されている状況にある。

バイトにでも精を出すことも考えたのだが、断れど断れど俺の口座には仕送りが充分すぎる金額振り込まれており、それでもって一度貰ったものに手をつけないで居られるほど俺の人間は出来てなくて、結局悠々自適に何もしない生活を二年半ほど続けていて……。

考えてみれば考えてみるほど随分甘ったれた境遇にあるな、と変

な自己嫌悪が湧き上がってきた。

「悩まれるのも当然の事でしょう」

俺が浮かべる表情を読み違えたのか、世界の重圧を背負うことに俺が悩んでいると悪魔は勘違いしている。

その間抜けなズレに悩みは吹き飛んだ。

世界の命運を前にどうでも良い自分のちっぽけさに凹んでいる俺。それを仰々しく慰めてるつもりの悪魔。

そんな間抜けさが引き金でもいいか。

それに世界を救うためにがんばって言うのだと自負できれば、ネクタイ姿の同級生に抱く劣等感も少しは軽減できるのではないか。

一瞬そんな事でいいのかという考えも過ぎるが、目の前の悪魔を見て考えを変える。

いきなり家に来て、超重要な話を緊張感ないまま、シユールな光景で淡々としたこいつが悪い。そう思うことにした。

「いいよ。俺に出来る範囲であれば極力協力するよ。世界に滅亡されたら困るし」

「おお！本当ですか！！誠にありがとうございます」

これまた声のトーンに対しあまり喜びを感じない様子で悪魔が謝辞を述べた。

「あ、最後に一個質問良いかな」

「なんなりと」

話を聞いてる最中にずっと気にはなっていたのだが、話の骨子には関係ないかと思いついてしまいでいた疑問をぶつける。

「世界の危機だから、世の中のためになんかしなきゃいけないだろっ?」

「ええ」

「神様はなにをやってるの?」

「彼らは天界で日々戦争に明け暮れていますよ」

憎らしいほどに淡々と話す悪魔。

人間のイメージ通りの神様が戦争に明け暮れている間に悪魔が世界を救おうと動いている。最高に笑えなさ過ぎる笑い話だ。

ちなみにその次に笑えなかつたのは、最高の風刺に引きつった笑顔が浮かべる俺に悪魔が悪意なしに言った一言だ。

「心中お察しします」

苦笑いを堪えきれず俺は答えた。

「それ、ギャグ?」

まあ、とにかくこれが事の顛末。そんなこんなでこの日から、俺はちよっぴり世界を救ってみることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6592i/>

彼らが役に立たないので

2010年11月14日09時17分発行